



発行：NPO 法人岡崎がくどうの会
【TEL&FAX】0564-32-0325
【E-Mail】okazakigakudou@yahoo.co.jp

2023年3月5日（日）に、第39回あいち学童保育研究集会在、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、オンラインと現地の併用で開催されました。今回は、感想を含めたレポートを一部ではありますが、紹介します。

他の指導員のレポートは、ホームページ(<https://okazakigakudou.jimdofree.com>)に掲載されていますので、お時間のある時にお目通しください。

【大手 初美さん（風の子クラブ 保護者）】

分科会① 『子どもとSNS』

全体会講演では子どものかかわりを増やす話が心に残りました。

保育園のおむかえ時に子どもが「空がキレーだね」とママに話をしたが、ママは急いでたのか「早く帰るよ」と言って手をひいて帰っていった事に、土佐いく子さんは、その時に少し足を止めて子どもに一言「星がキレーだね」と返事をするだけでもいいから、子どもの興味をもったものに親は関心を持って、言葉を返すのを増やしていくだけで良いと。今の時代、それが難しい事で余裕がない親には、かかわりが少なくなっているのに繋がってしまうと考えさせられました。

分科会では「子どもとSNS」の講座を受講しました。親の世代でも、生まれた時からバーチャル空間がある中で大人になり子どもを育てている人もいる中で SNS 関連の問題が出てくるのは当たり前だと思いました。現代は「うつつの世界」があり、「現実」と「電子空間（バーチャル）」を行き来する生活が今の普通だと認識させられました。

たくさんのお話の中で親として子どもには、SNS を楽しんでもらいたいながらも、危険があることも教えて上手に SNS を使って行って欲しいと感じました。

【都築 まり奈さん（あおぞらクラブ 保護者）】

分科会⑧ 『いつものがくどうで、いつものように絵本を、お話を。』

講演会への参加は初めてでしたので、厳かな感じを想像して少し緊張して参加しましたが、絵本作家のサトシンさんがとても気さくでユーモアに溢れた楽しい方で、作詞を手掛けた歌を披露して下さい、ご自身の絵本も臨場感たっぷりにアドリブも交えつつ朗読して下さい、あっという間に時間が経ってしまいました。

絵本が苦手な子には無理強いせず、興味が出てくる時までそっと待つこと、子どもとのものがたりを作る遊びのコツは、続きを楽しみにしている雰囲気を出しながら、「それで?」「次はどうなったの!？」など、子どもたちの次の言葉を引き出す相槌を入れること、といったたくさんの参加者の質問にも丁寧に応えて下さり、今後の子育てでの創造、想像力のある子を育てる1つのコツとして、すぐに参考にしていきたいと思える気づきがたくさんありました。参加できて良かったです。

【矢頭 可南子さん（あそびばクラブ 保護者）】

分科会⑯ 『思春期・反抗期の子どもたちとの向き合い方』

子どもの問題行動や発言には、頭ごなしに怒ったり禁止するのではなく、「なぜ？」を大切にし、原因を知ろうとする事が大切なのだと思わせてもらいました。また、ただなぜ?と聞いてもすぐには話してくれないという前提を踏まえ、自分と子どもの間の「みち」を広げておくこともとても重要な要素だと教えて頂きました。子どもから見て「話しても分かってもらえる」と思わなければ、本心は話してくれないので、その信頼関係を築くための「みち」を普段から作っておくことが大切なのだと思います。

日常生活では仕事で疲れてわがママを言われてしまうついつい頭ごなしに怒ってしまいがちですが、なぜわがママばかり言うのかも考えて、子どもと向き合う時間を作ろうと思いました。

【谷口 梨香さん（あおぞらクラブ 保護者）】

全体会 『人間への信頼と人と手をつなげる子どもたちに』

～どの子も見捨てない学童保育をめざして～』

土佐いく子先生の講演を拝聴させていただき、子どもとの関わり方について多くの学びがありました。

私自身、子育てで深く困ったり思い悩むこともなく過ごしてきましたが、それでも日々こんな時はどう接するべきか、子どもはどうしてほしいのだろうか？と考えることはあります。

土佐先生のお話の中で、大人が困り悩んでいる時は子どもも困り悩んでいるのだというフレーズに、そういうことかと気づきを得ました。そんな時、子どもに寄り添い受け止め一緒に悩み考えることのできる大人でありたいと強く思いました。しかし本当の自分を出しても大丈夫だと信頼してもらえぬ関係性を作っておかないと子どもからのそのような感情をぶつけてもらえないとも思いました。なのでそのような関係性の親であり大人であるためにも、日頃から子どもの声に耳を傾け、しっかりと心の声を聴きたいと考えるきっかけになりました。

家庭以外、学校や学童の場でもありのままの自分を受け入れてもらえる、自分を出しても大丈夫なんだと安心して過ごすことができる環境や指導の場であってほしいと願います。

【高井 亮助さん（風の子クラブ 保護者）】

分科会⑤ 『食と栄養/学童保育におけるおやつ の意義と衛生管理』

分科会では、主におやつ のことについて学びました。

学童保育でのおやつ の必要性として、第 1 に栄養の補給があり、通常朝昼晩の 3 回の食事だけでは成長に必要な栄養素（たんぱく質やカルシウム、鉄等）を補えない為、1 回の間食（おやつ）で補っている。第 2 に水分の補給、第 3 に休息を取る為である。

おやつ の量と回数については午後 1 回（1 日の総エネルギーの約 15%）が良い。

おやつ の時間が遅くなることで夕食時におなか がすかなくなってしまう為、夕食を美味しく楽しく食べるためには①夕食の時間、②おやつ の時刻、③おやつ の量を考える必要がある。

子どものおやつ としては市販のおやつ よりも手作りのものが良い、というのも市販の物には食品添加物を含む場合が多く、味覚の発達を阻害する可能性があるうま味調味料を加えた物が多い為である。他にもカルシウムや鉄といった子どもに必要な栄養素が少ないものも多く、量や回数が与えすぎになりがちである。

普段、市販のおやつ を与えている為、子どもと一緒に作ることが出来る手作りおやつ も、コミュニケーションを取りつつ行うといいのかもしれないと思いました。

また、子どもの味付けは大人の半分くらいでいいとのことで食事の味付けも見直すいい機会となりました。

講座の後半では少人数グループでの話し合いを行い、他の学童保育所の状況を伺うことが出来ました。どこの保育所もおやつ について色々 と悩み、よく考えていただけているということが大変よく分かりました。

また、このような場を受ける機会があれば参加したいと思いました。

【伴 裕佳さん（あそびばクラブ 指導員）】

分科会⑩ 『大人に知ってほしい性の話』

子ども達からの質問やパーソナルな部分に触れてしまう事などがあつた時にどう答えたら良いか正しい判断が分からずモヤモヤとした部分があつたのですが、今回の性についてのお話を聞いて大人である私たち自身が理解して正しく伝えて、子どもが正しく人の体について知っておく事の大切さを学ぶ事ができました。

性に関する質問や発言について、タブー感や言ってはいけない事などといった先入観があつたなと感じました。子どもが自身や他者の体について正しく知っておかないと間違った行動をしてしまつたり、性被害について認知が出来なかつたり、といった事にもつながつてしまつたり、きちんと子どものうちから自身の身体について知っておく事の大切さを知る事ができました。

子ども達の疑問に大人が嘘をついたり誤魔化したりする事で恥ずかしい・いやらしい事なんだといった意識を作ってしまうというお話は、確かに大人が「恥ずかしい」、「やめなさい」などという事によって子ども達は面白がつたり言ってはいけないと言われる事を言ってみたくと思うんだなあと思いました。恥ずかしいからやめなさいじゃなく大切な場所だから大事にしようと、体や自分自身を大切に思えるように伝えて行ければと思います。

また、心地良いと思つたり嫌だと感じる事は人それぞれ違ふので相手の気持ちを必ず確認する事や嫌だと思つたら嫌だと言つて良いとしっかりと伝えていきたいです。学生の頃に授業で学んだ話だけで無く、今回の講義で改めて性に関してのお話を聞いて子どもをみる大人の立場として様々な配慮についての理解ができたのでとても良かったです。

【小澤 あづささん（なかよしクラブ 保護者）】

分科会① 『子どもとSNS』

大変勉強になりました。ありがとうございました。

全体会、分科会を通して言えることは、自分の人生を自分でプロデュース出来る、コントロールできる能力が必要と言うこと、またそれを養うためには、心理の基本である①自己肯定感 ②他者信頼感 ③貢献感が必須となること、さらに掘り下げるとそれらは家族という、社会の最小の単位での現実的な幸福感にて養われるということでした。

ただ、それ（理想）は恐らく多くの親も分かっていることで、問題なのはそれを実現出来ない家庭環境にあると思います。

スマホを見て子どもを見ていない。スマホは悪とよく言われます。実際のデータでもそう出ているのならそうでしょう。しかし私はそうは思いません。スマホで仕事を探している時もある、資格の勉強をしている時もある、それらは時として長時間に及びます。共働きの核家族なら子どもが起きている時にそれらをやらなければいけないこともある。そんな時に必要なのは、子どもに今、何故スマホを触っているのか説明をすることだと思います。「ちょっと待って」の終わった後に、思い切り遊べば良いのではないかと思います。

また、文化に触れあうことも大事なのが分かります。ですが、文化的なものは高価なものが多いです。身の回りに文化的なものを置ける余裕がない家庭もあります。

「古き良き時代」は感受性も豊かになり素晴らしいです。しかし全員が同じ価値観なら問題ないですが、政府がGIGAスクール構想を推し進める時代です。時代によって行かないと日本では目立ってしまい、孤立からいじめに発展する問題もあります。

ひとつのことを様々な視点から見るのが重要であり、根本的な問題解決にはまだまだ時間がかかると感じました。

【中村 千弥さん（あおぞらクラブ 保護者）】

全体会 『人間への信頼と人と手をつなげる子どもたちに

～どの子も見捨てない学童保育をめざして～』

・基調報告について

学童保育は私たち働く保護者にとってなくてはならないものです。指導員さん達の働く環境について考える良い機会となりました。これからも学童保育が指導員さん、保護者両方にとって良いものであるように協力できる場所は協力したいと思います。

・記念講演について

土佐先生のお話の中に、学童保育のあり方・ねうちについてありました。子どもが1年生になり、今年度より学童保育に通っています。保育園を卒園し、知り合いもない学童保育に子どもを預けることに、また子ども自身も通うことに不安を覚えていました。4月1日より通っていますが、毎日子どもはとても楽しそうです。1年生から6年生までいろんな子どもと遊べること、指導員さんから様々な遊びや体験をさせてもらえることに日々感謝しています。『今日はこういうことをした』『〇〇っていう食べたことないお菓子があって、迷ったけど食べてみたらおいしかった。』など、家や学校の中だけでは経験できないことを学童保育でさせてもらっています。

“どんな自分も見捨てられない場でありたい”という言葉が先生のお話の中にもありましたが、子どもから毎日学童保育での楽しい出来事を聞くと、指導員の皆さんが、子どもに対して向き合って対応して下さっていることが伝わります。そのおかげで、上記の言葉のように“見捨てられない”から“子どもにとって安心できる場”になっているのだと思います。

今後も指導員の皆さんにとって働きやすく、また子どもたちにとっては安心して自分を出せる場であるように、一保護者として、学童という場が良い環境の中、成長していくことを願っております。

貴重な講演に参加させていただき、誠にありがとうございました。

～編集者からひとこと～

今回のよりどころには、保護者の皆さんのレポートを中心に掲載しました。

あいち学童保育研究会は、保護者の皆さんに参加していただく研修会です。さまざまな理由で我が子を学童保育へ通わせている保護者さんに、学童保育やそこで働く指導員、子どもたちについて知っていただける機会の1つになっています。

たくさんの保護者の皆さんに参加していただき嬉しく思います。ありがとうございました！

【林 佳奈さん（風の子クラブ 保護者）】

分科会⑩ 『思春期・反抗期の子どもたちとの向き合い方』

今回私は「思春期・反抗期の子どもたちとの向き合い方」という分科会に参加させていただきました。息子はまた小学校1年生ですが、宿題やゲームなどのことでもめることも多く、思春期・反抗期を迎える前に子どもとの関係性をよりよくする方法を見つけておきたいと思ったことが参加の決め手となりました。

小学校の先生でもあり著書も多数ある岡崎勝先生が講師となり、前半は講義を聞き、後半はグループに分かれて意見交換をし、先生へ質問をするという流れで講座がすすみました。講義では「承認」…良さに気づく、ほめること。「傾聴」…まず聴くこと。「共感」…先入観から自由になること。について学びました。私たち大人は何か問題が起こった時だけ原因を追究したり、話を聞こうとします。が、その瞬間だけで聞こうとしても話すわけがない。関係性は日ごろから作り上げるものだというお話でした。「傾聴」は子どもに一方的に話しかけて答えを聞く事ではありませんよ、と言われてハッとしました。私は息子の学校での様子が知りたくて、学童からの帰り道でいろいろと聞き出そうと質問を繰り返していたのですが（しかも質問も毎日同じパターン）、大人が矢継ぎ早に質問するのではなく、沈黙に耐え、子どもが話し始めるのを待つことも大切だと気づきました。また先生は、子どもたちの流行や会話についていけるように高学年女子向けの雑誌を購入したりして会話の糸口を広げているそうです。大人は子どもとの関係性の幅を広げるために色々な会話のルートを持つ努力をしなければと言われる、自分自身を振り返ってみました。すると、息子のゲームへの執着に対し否定的な事ばかり言っている自分がいました。「見て！レベルが上がった！！」と言われても「すごいね！がんばったね！」ではなくひとこと目から「時間だから終わりにしなさい！」と怒ったりして、決まりごとや日々の忙しさを優先して、息子の興味や楽しみを無理やり奪うような気持ちにさせていたのかもしれないと反省しました。一緒にゲームを楽しんだり、キャラクターについて教えてもらったりと私から歩み寄れることはたくさんあるように思います。息子の興味や思いに寄り添ってより幅の広い関係性を作り、思春期・反抗期を迎えた時に何か一つでも会話ができるような親子でありたいなと思いました。

後半の意見交換会では、指導員4名、保護者2名のグループで先生に質問したいことや困っていることなどを話し合いました。その中で指導員の先生方はみなさん、高学年と低学年の交流について悩みを抱えていました。さまざまな学年の子がいる教室で全員が楽しめるようにイベントを実施したり、日々の活動を行ってくださっていることを改めて実感し、指導員の先生方の凄さを感じました。現代は兄弟であっても別々で食事をしたりする家庭も多く、他学年と交わることがそもそも少なくなっているそうです。学童保育は普段の子どもたちが体験できない場所を提供しているので難しく当然、と岡崎先生もおっしゃっていました。私は息子に対し、学童に預けることに申し訳ないような気持ちを持つこともありました。しかし、この分科会に参加させていただき、他学年と関わる環境にいられること、みんなで楽しめる教室を作ろうと思ってくださる指導員の先生方に囲まれて過ごせることはとても貴重な体験であり、きっと今後の成長に大きく役立つものになるのではないかと思います。参加させていただきました。学童保育の重要さと指導員の先生方への感謝の思いを改めて感じる機会となりました。参加させていただきましたありがとうございました。

【庄司 敦子さん（つくしクラブ 保護者）】

分科会⑩ 『思春期・反抗期の子どもたちとの向き合い方』

<学んだこと>

・低学年は、「すごいね！」とほめればすぐに満足するが、高学年になると、子のよさを具体的に言わないと伝わらない（本人が納得しない）。叱った後にほめても届かない。先にほめてから注意するとよい。

・思春期に入ると、周囲が自分をどう見ているか、自分に何を期待しているかを「自分で」判断し、（誤解していても）相手の反応を先取りして、そう応じてしまうことがある。「よい子」の基準もそうしていくうちにすり込まれる。

←しかし本来はちがうので、そのギャップがジレンマとなり、ストレスとなる

・思春期は「元気で明るい親」を願う。立派な親だと疲れる。

悩みがあったら「こうあるべき」を言うのではなく、共感と寛容が大切。ただ聞くだけでもいいが評価はしないこと。

<感じたこと>

・まだ思春期ではありませんが、子どもの悩みを聞いても「こうすればいい」と簡単に言うところがあるので、良くないなと反省しました。

もっと子どもに寄り添って、共感・寛容に重きをおいて接していこうと思います。